中国西南地方における後漢時代の青銅器生産

岡村 秀典

1．漢代の銅生産

中国西南地方の四川・雲南省は鉱産資源の豊富なところである。銅の産地として、『漢書』地理志には越嶲郡邛都県南山、益州郡俞元県懐山・来唯県蜀山をあげ、『続漢書』郡国志五には越嶲郡邛都県南山、益州郡俞元県装山（懐山）・賁古県采山、犍為属国朱提県をあげている。また、錫の産地として、地理志には益州郡律高県石空山・賁古県采山・南烏山、郡国志には同じく益州郡の各産地をあげ、鉛の産地として、地理志には益州郡律高県豔町山、郡国志には豔町山と賁古県羊山をあげている。

四川の銅生産について『史記』巻125鄧通伝は、漢文帝の寵臣鄧通が蜀の厳道の銅山を賜って貨幣を鋳造したと伝え、その「厳道」について『史記正義』に引く『括地志』は「雅州榮経県の北三里に銅山あり」という。いまの四川省雅安市榮経県であり、四川盆地とチベット高原の境に位置する。この鄧通の鋳銭遺址について、南朝のとき銅銭を鋳造する原料不足が問題となり、490年に劉悛は次のように上奏している（『南斉書』巻37劉悛伝）。すなわち、蒙山の下に蒙城という名の城があり、二頃（約6ha）ばかりの土地である。焼炉（の残骸）が四か所あり、（それぞれ）高さ一丈（約2.5m）、広さ一丈五尺（約3.8m）。蒙城から川を渡り南に百歩（約150m）ばかりのところで地面を深さ二尺ほど掘ると、銅（鉱石）が露れた。また、むかし銅を掘った坑道の跡があり、深さ二丈、居宅の跡もなお遺存している。鄧通は南安（四川省楽山市）の人で、漢文帝は（鄧通に）厳道県の銅山を賜い、銅銭を鋳造した。いまの蒙山は青衣水の南に近く、青衣水の左側は故の秦の厳道の地である。青衣県はまた名を漢嘉と改めた。また、蒙山は南安から二百里（約100km）の距離である。思うにこれは鄧通の鋳造遺址であろう、と。蒙城の城内に焼炉址があり、その近くに銅鉱の埋蔵や坑道址があることから、鄧通の鋳銭遺構かどうかはわからないとしても、それらは銅精錬の関係遺址であった可能性が高い。

西南夷最大の邛都夷を征服した漢武帝は、そこに越嶲郡を設置する。郡治は邛都県（四川省涼山彝族自治州西昌市）にあり、上述のように、その南山は銅の産地として知られている。その東坪遺址が発掘され、住居址、錬炉址、貨泉や五銖銭の鋳型、鋳造関係の遺物などが大量に出土した。そのなかに越嶲郡の「越」字を打刻したインゴット（銅錠）や貨幣の鋳型が大量に含まれることから、郡が経営する王莽期から後漢中期の製錬・鋳銅遺址と考えられている〔四川大学歴史系考古専業ほか1994／四川省文物考古研究院ほか2006〕。また、東坪遺址から出土した鉱石・スラッグ・インゴットを化学分析したところ、いずれも鉛を多く含む銅合金であり、スラッグの金属粒は銅70％以上、鉛20％以下の銅鉛合金であり、アンチモン・砒素・錫などは平均2％以下にすぎず、一部の鉛は30～50％に達しているという〔厳ほか2018〕。

また、雲南省南部の箇旧市沖子皮坡製錬遺址では、錫・鉛のスラッグや鉛のインゴットが出土している〔胡 1994〕。箇旧は益州郡賁古県に比定され、『漢書』地理志上の本注に「北采山出錫、西羊山出銀・鉛、南烏山出錫」とあり、錫・銀・鉛の産地として知られている。

貨幣や青銅器の鋳造工房は都市に多く所在し、その原料はインゴットの形で運ばれた。西昌市東坪遺址の東北 3 km にある石嘉公社では貨泉の鋳型 5 点にともなって円孔をもつ断面台形のインゴット 17 個が窖蔵から一括出土した。いずれも長さ 50 ×幅 25 ×厚さ 10 ～ 12 cm の短冊形で、上方に大きな孔があり、重さ 53 ～ 58 kg、「百九十六」や「二百二十四」などの数字を刻み、蛍光 X 線分析によれば鉛の含有量は 10 %以上であった〔西昌地区博物館 1977〕。また、四川省彭山県から出土したインゴットは長さ 46 ×幅 18 ×厚さ 3.5 cm の短冊形で、上方に大きな孔があり、15.5 kg の重さがある〔丁 1979〕。正面に陽文で「西順郡□苻則車山官」、左側面に「第二百三十八」、右側面に「重七十一斤」と刻んでいる。西順郡は王莽が犍為郡を改めた名。番号と重さをインゴットに刻み、郡がその生産を管理していたことがうかがえる。このほか漢長安城の宣平門の近くで出土したインゴットは、長さ 38 ×幅 20 ×厚さ 7 cm、中央に径 6.5 cm の孔があり、「百三十斤」「百二十九斤」「百二十八斤」などの文字を刻み、銅の純度は 99 %と報告されている〔賀 1956〕。また、広西壮族自治区北流市銅石嶺遺址から出土した円餅形のインゴットは、重さ 2.5 kg ほど、銅の純度は 96.64 %と報告されている〔広西壮族自治区文物工作隊 1985〕。インゴットの形や重さは多様であるが、純度は比較的高かったことがわかる。

2．朱提堂狼の開拓

本誌の「黒川古文化研究所蔵銅盂の化学分析報告」（以下「報告」と略す）に論じたように、銅盂の銘文にみえる「朱提」と「堂狼」は雲南省東北部の旧地名である。あたりは雲貴高原のほぼ中央部に位置し、長江上流の金沙江が四川省との境界を北流している。

漢武帝は前 135 年に巴蜀（四川省）の兵を徴発して夜郎（貴州省）から南越（広東省）の攻略に着手した。このとき成都平原の南部に犍為郡が設置され、かつて僰侯国の所在した僰道（四川省宜賓市）を郡治とした（『史記』西南夷列伝）。ここは金沙江と北から流れる岷江との合流点であり、長江の本流はここからはじまる。武帝は前 109 年にふたたび巴蜀の兵を発して滇（雲南省）を制圧し、犍為郡の南に朱提（雲南省昭通市）・堂琅（同会沢県）など 4 県を置いた（『華陽国志』巻 4 南中志）。犍為郡はこのように四川から東南に貴州･広東へ、西南に雲南へと通じる要衝に位置し、その南部に位置する「朱提」と「堂狼」は雲南への交通路上にあたっていた。

「朱提」の音について『漢書』地理志上の注に引く蘇林説では「朱の音は銖、提の音は時」、同食貨志の顔師古注では「朱の音は殊､提の音は上支の反」､『後漢書』南蛮西南夷列伝の劉昭注に「朱の音は殊、提の音は匙」というから、「シュジ」または「シュシ」と音読される。後漢時代になると、西南夷の多く住む犍為郡の南部は永初元年（107）に朱提・漢陽の 2 県を都尉が管轄する犍為属国となり、住民は 7938 戸、3 万 7187 人という（『続漢書』郡国志五）。後述のように後漢時代の銅盂には「堂狼造」銘が多く用いられているが、郡国志に堂琅（狼）県の名が消失するのは、その行政区が朱提県に含まれたからであろう〔汪 1992：100-110 頁〕。下って 212 年に劉備が蜀を占拠し、215

年に鄧方が属国都尉になると、その官職を太守に改め、朱提・南広・漢陽・南秦・堂琅の県を管轄する朱提郡が新設され（南中志）、ふたたび堂琅県が復活した。

朱提・堂琅の周辺は鉱産資源が豊富であった。『漢書』地理志上には「朱提、山に銀を出す」、『続漢書』郡国志五に「朱提、山に銀・銅を出す」とあり、漢代には銀や銅の産地として有名であった。とくに朱提の銀は品質がすぐれ、王莽は幣制改革によって朱提銀1流（重さ8両）＝1580銭、它銀1流＝1000銭に定めたという（同食貨志下）。考古資料をみると、「（朱？）提」「銀」などの刻銘をもつ銀塊が『陶斎吉金録』巻7に収録され、1935年には昭通市劉家包包の墳墓から「□□重五十斤」と刻んだ約2 kgの銀塊が出土し（いま昭通市博物館蔵）、その銀の含有量は約42％と分析されている〔汪1992：107頁〕。このほか伝昭通出土の銅製「大泉五十」銭笵があり、王莽期には銅銭も鋳造されていた可能性がある〔同上〕。また、四川省通江県出土と伝える永元元年（89）銅盂（洗）には「朱提堂狼銅官造作」の銘があることから〔李2009〕、犍為郡には「銅官」が設置され、官府が主導して銅を採掘し、銅盂をはじめとする各種の青銅器を生産していたことがわかる。しかし、3世紀になると、『続漢書』郡国志五「犍為属国」の劉昭注に引く『南中志』には「旧と銀窟数処有り」とあり、同じく『諸葛亮書』には「漢嘉の金、朱提の銀、之を採りて以て自食するに足りず」という。諸葛亮が225年に南征したころには、朱提の銀鉱はすでに多く廃坑となっており、漢嘉（四川省雅安市）の金や朱提の銀は十分な産出量ではなかったことがうかがえる。

雲南省昭通市は朱提県治に比定される。白泥井村鶏窩院子で発見された土坑木棺墓は後漢前期にさかのぼる土坑木棺墓で、五銖銭2200枚・大泉五十銭50枚など多数の青銅器が出土した〔昭通地区文物管理所1986〕。そこから東70 kmほどの烏蒙山中には夜郎文化の影響がのこる貴州省赫章県可楽墓地〔貴州省文物考古研究所編2008〕があり、鶏窩院子墓はそれより漢化がいっそう進んでいる。この鶏窩院子から1 kmほど離れたところでは1901年に古墓の前から「孟孝琚」碑が出土している〔袁1923〕。石碑の上部は欠失するが、残高1.33 m、幅0.96 m、厚さ0.3 m、左右に青竜と白虎、下に玄

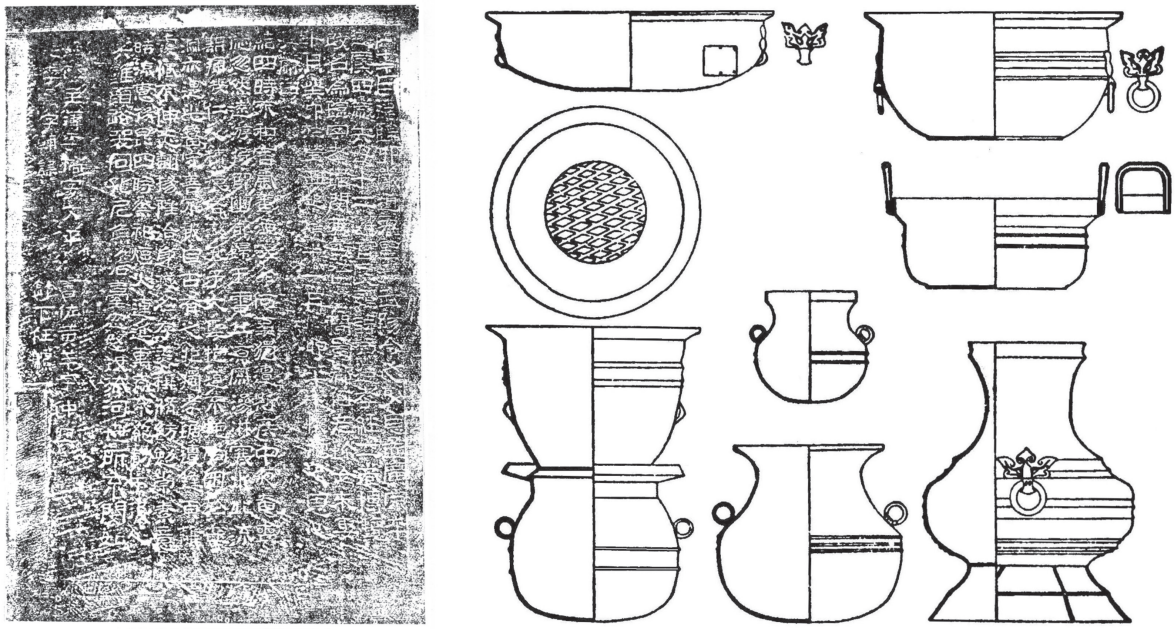

図1　「孟孝琚」碑文拓本　〔袁1923〕と雲南省大関県岔河3号崖墓出土青銅器〔雲南省文物工作隊1965:図3を改変〕

武を刻み、隷書体で15行21字に碑文が残存している（図1左）。年号を記した冒頭の7字ほどが欠失しているため、立碑年代については意見が分かれているが、永寿二年（157）ごろに比定する説が有力である〔汪1992：110-112頁〕。碑文は厳道君の曾孫にして武陽令の子である孟広宗、字は孝琚の夭折を悼む内容である。すなわち、孟孝琚は12歳にして父の任地である武陽県（四川省彭山県）にて『韓詩』を学び『孝経』に通暁した。孝琚は蜀郡の何彦珍の娘と婚約したが、結婚の前に死没した。十月癸卯に族墓地の西に墳墓を築き、十一月乙卯に埋葬し、碑を立てたという。悼辞の後には立碑に関わった武陽県の主簿・書佐ら4人の名が列挙されている。厳道君についての詳細は記されていないが、前節にみたように「厳道」は鄧通が銅山を開発して銅銭を鋳造したところであり、その地の有力者であったのだろう。その厳道君の子孫が、鉱産資源の豊富な朱提に移住してきた可能性が高い。

孟孝琚の父が県令を務めた武陽は犍為郡の北端に位置し、後漢時代には郡治が置かれた。北には蜀郡に接し、厳道君以来の縁故もあって孝琚は蜀郡の何彦珍の娘と婚約したのであろう。孝琚が『韓詩』や『孝経』を学んだのはその武陽であるが、朱提郡の人びとは学を好み、犍為郡に近いため士人が多く、寧州（雲南全省）の冠冕であったと『華陽国志』巻4南中志は讃えている。

南中志はまた南中大姓のひとつに孟氏をあげる。孟孝琚は本籍のある朱提県の族墓地に埋葬されたが、その昭通市郊外には200基あまりの墳墓が分布し、二坪寨の甎室墓からは「孟滕之印」銅印、別の墳墓からは「孟琴之印」銅印が出土し、後漢時代の朱提県において孟氏は有力な豪族であったと考えられる〔汪1992：95-97頁〕。下って諸葛亮の南征において「七擒七縦」の故事で知られる孟獲は建寧の出身、同じく諸葛亮に帰順した孟琰は朱提の出身とされる（南中志）。孟氏は後漢から蜀漢・晋時代にかけて南中地方に勢力をもった豪族であったのだろう〔張1990：249-251頁〕。

昭通市には甎室墓のほかに四川に特有の崖墓が分布している。たとえば市区の北に隣接する大関県岔河では並列する3基の崖墓が調査され、そのうち2人を合葬した3号墓からは銅盂・釜・甑・壺などの実用青銅容器（図1右）、鉄刀3本、鉄剣1本、五銖銭863枚が出土した〔雲南省文物工作隊1965〕。報告者は四川との類似性を指摘しつつ、雲南の崖墓は甎室墓と構造が異なるだけでなく、陶製の家畜模型や杯案の類が副葬されていないことに注意している。

ちなみに、大関県には広大な毛坪鉱山があり〔Zhiwei Bao *et al.* 2017〕、その鉛同位体比は領域Bに属し、会沢鉱山や黒川古文化研究所蔵①章和二年（88）「堂狼造作」盂・④建安二年（197）「八月造作／周氏」盂の値に近い。しかし、西に隣接する永善県金沙廠鉱山の鉛同位体比は、同③永初元年（107）「堂狼朱提造」盂と同じ領域S-B間である〔齋藤2003／Jia-Xi Zhou *et al.* 2015〕。朱提県域には領域Bと領域S-B間の両方が交錯しているのである。

昭通市石門坎では1936年に「蜀郡」「千万」銘の鉄スキ先3点、1954年には魯甸県漢墓の封土から「蜀郡」「成都」銘の鉄スキ先1点が出土した〔李1962〕。いずれも蜀郡の鉄官で制作された農具であり、朱提県は文化的にも経済的にも蜀郡と密接につながっていたことがうかがえる。

朱提県から金沙江または横江を下り、前漢時代に犍為郡治となった僰道（四川省宜賓市）から岷江をさかのぼれば、後漢時代に犍為郡治となる武陽県（四川省彭山県）、そして蜀郡治の成都県に到達する。武帝の拡張政策によって西南夷の居住するこの地に犍為郡、さらには雲南への交通路上に朱提県が設置された。水運を利用してさまざまな物資が犍為郡と蜀郡の間で輸送され、おそくとも前漢末期には朱提の銀山や銅山の開発が進められた。鄧通が銅銭を鋳造したという蜀郡の厳道に勢力をもつ厳道君の子孫が、ここ朱提に移住してきたのもそのころであろう。

３．朱提堂狼の青銅容器

後漢時代には「蜀郡董氏」や「蜀郡厳氏」などの作器者や「朱提造」や「堂狼造」などの犍為郡（犍為属国）の地名を記した銅盂（洗）が多数制作されている。呉小平ら〔2021〕はこれを蜀郡器と朱提堂狼器の２グループに大別し（図２）、朱提堂狼器には魚・鷺鳥などの紋様をもつ盂（洗）・盤・鍋・卮があり、年号や産地を銘文に記したものが多いのに対して、蜀郡器には羊・鼎・鳳鳥などの紋様をもつ洗・盤があり、姓氏や吉祥句を銘文とするものが多いという。

このほか雲南省昭通市では「陽嘉二年邛都造」銘の銅盂が収集され、伝世器には「陽嘉四年青蛉」という銘文も確認されている〔汪 1992：100-110 頁〕。「邛都」は越嶲郡治、「青蛉」はその属県であり、両県とも雲南省大姚県のあたりに比定される。銘文の特徴からみると、いずれも朱提堂狼器に近い作例であり、越嶲郡でも 130 年代前半に小規模ながら銅盂が制作されていたことがわかる。

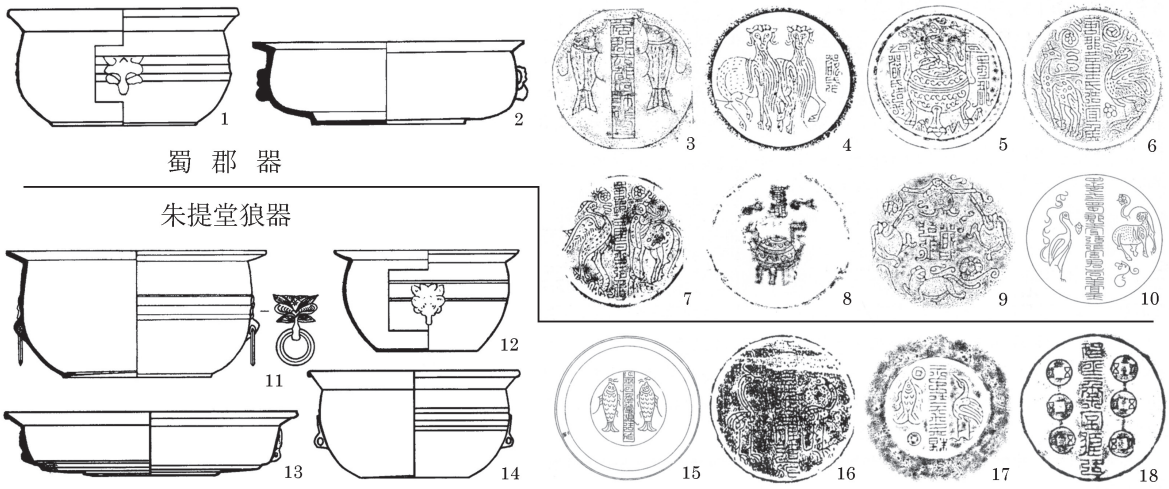

図２　蜀郡器と朱提堂狼器〔呉・魏 2021：図３・４・１・２を合成〕

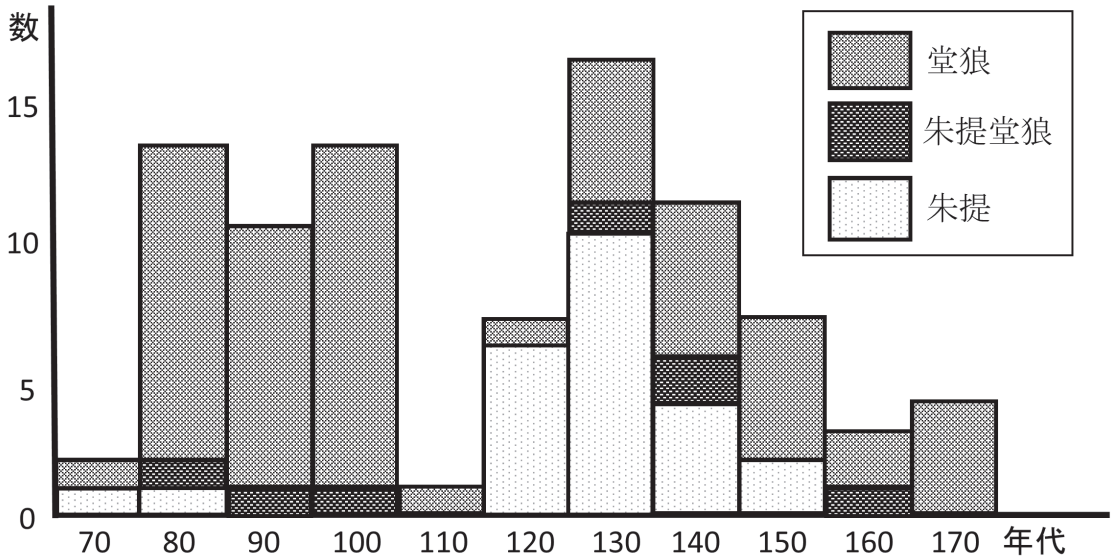

図３　紀年銘をもつ朱提堂狼器の時期的変遷（呉・魏 2021 をもとに岡村作成）

朱提堂狼器には建初元年（76）から熹平四年（175）までの紀年銘をもつものがあり、呉小平ら〔2021〕は計87器を数えている。それを10年ごとに「朱提」「朱提堂狼（堂狼朱提）」「堂狼」に分けて度数分布を示したのが図3である。「堂狼」器は76～175年、「朱提」器は79～156年、「朱提堂狼」器は89～161年の作例があり、数はその順に多い。孫太初〔1981〕は『続漢書』郡国志五の「朱提山出銀銅」の注に引く『南中志』に「西南二里に堂狼山有り」とあることから、その「堂狼」を朱提県内の山名としているが、鋳造工房の所在地ではなく鉱山の名を銘文に記したとは考えがたい。永元元年（89）器の「朱提堂狼銅官造作」という銘文からみて、朱提県と堂琅（狼）県の両方に官営の制作工房があり、銅官が両者をコントロールしていたのだろう。図3をみると、110年代を境として前後2期に大別でき、前半期は「堂狼」器、後半期前半は「朱提」器が多く、後半期後半の130年代からは「堂狼」器の数がふたたび増加している。110年代に数が激減したのは、107年に犍為郡の南部が属国に再編され、堂琅の行政が朱提県に移管されたのが一因かもしれない。もっとも、これは紀年銘をもつ器に限定した数量であるから、銅器生産の実態をそのまま反映したものではない可能性もあろう。

一方の蜀郡器には紀年をもつものが少なく、成都市永豊公社出土の中平五年（188）「蜀郡工官造作、周君」銅盤と黒川古文化研究所蔵の④建安二年（197）「周氏」銅盂の2例のみである。川村佳男〔2021〕は蜀郡器と朱提堂狼器の銅盂を1系列として3期に編年し、第3期後半（後漢末期）に朱提堂狼から蜀郡へと制作地が移転したと推測する。しかし、山東省蒼山県柞城では元和四年（87）「江陵黄陽君作」銅壺や永元二年（90）「堂狼造」銅盂にともなって蜀郡器の「蜀郡董氏造」銅盂や「武氏造」銅盂が出土し〔劉・劉 1983〕、「報告」に示したように蜀郡器と朱提堂狼器とは銘文と鋪首の方向など制作の原理が異なっていることから、両者は同時に並行する2系列の銅器群と考えるのが妥当であろう。文化レベルからみても、蜀郡器が朱提堂狼器に先行し、蜀郡器の模倣として朱提堂狼器が生産されたと推測される。ただし、漢末には西南夷諸族の反乱によって犍為属国の経営がむずかしくなり、朱提堂狼器は175年を最後に消失する〔呉・魏 2021〕。以後は蜀郡器の生産だけが継続したのであろう。

出土地をみると、朱提県の所在した雲南省昭通市からは多数の朱提堂狼器が出土し、紀年銘をもつ出土例に76～144年の8器がある〔丁 2018／呉・魏 2021〕。

昭通市甘河白泥井漢墓出土：建初元年（76）堂狼造
昭通市柜子洞出土：建初八年（83）朱提造作
昭通市諸葛営出土：永元元年（89）朱提堂狼
大関県岔河崖墓出土：永元四年（92）堂狼造
昭通市洒漁李家湾出土：永元八年（96）造
大関県黄葛徴収：延光二年（123）朱提
昭通市諸葛営徴収：永建五年（130）朱提造
大関県黄葛徴収：漢安三年（144）朱提造

昭通市からは「堂狼」・「朱提」・「朱提堂狼」器の3種すべてが出土しているが、「朱提」は計4器でやや多い。また、朱提堂狼器は益州（雲南・四川・陝西省、重慶市）のほか、遠く山東省からも出土している（図4）。紀年銘をもつ確かな出土例をみると、西暦80年代までは昭通市の3例のほか、四川省宜賓・広漢・通江市、重慶市忠県から出土した4例がある。資料数は少ないものの、80年代までの朱提堂狼器はほぼ益州内に限って流通していたようである。しかし、90年代には貴州省

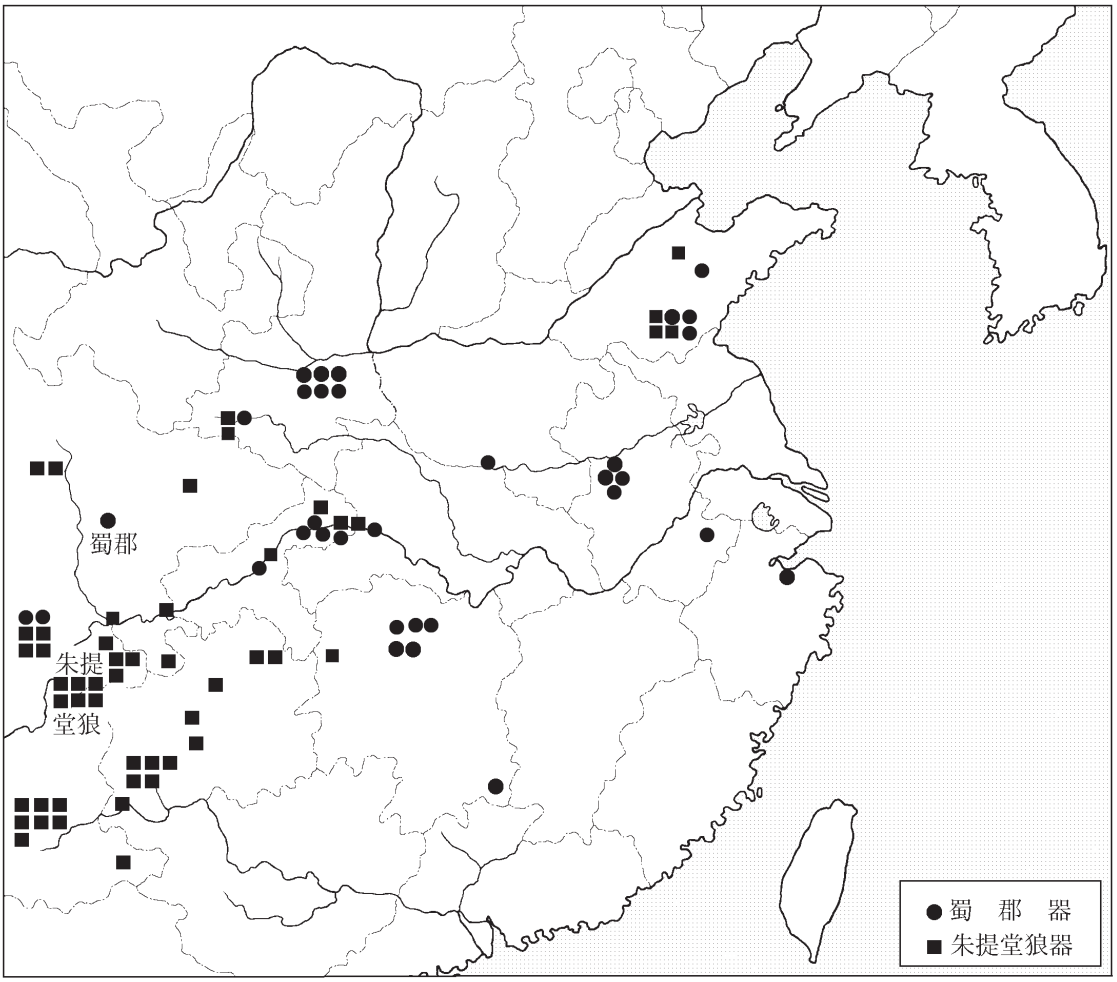

図4　蜀郡器と朱提堂狼器の分布（呉・魏 2021 をもとに岡村作成）

興義県、山東省蘭陵県・済南市、100 年代には湖北省咸豊県、河南省鎮平県、陝西省勉県、山東省章丘県など益州外の遠隔地にも広く流通していったことがわかる。つまり、犍為属国への再編によって朱提堂狼器の販路はむしろ拡大していったといえよう。

一方の蜀郡器は、朱提堂狼器よりも広域に分布し、朱提堂狼器の多い雲南・貴州省からは出土していないが、関中・河南・安徽・浙江では蜀郡器のみが出土している〔呉・魏 2021〕。蜀郡器をきちんと編年する必要があるが、章帝のころに民間作器と市場交易がさかんになり、蜀郡器の販路が大いに拡大し、その需要に応えるために朱提堂狼器の供給量が増大していったのではなかろうか。

朱提堂狼器は官営の銅官作器が主であったとはいえ、四川省西昌市涼山州電視台基建工地出土の永和元年（136）盂には「永和元年李造作工」という銘文があり、呉小平らはこれを朱提堂狼器としているから、李氏の個人工房で制作されていたことがわかる。李氏はのちに朱提郡の大姓のひとつにあげられ（『華陽国志』巻 4 南中志）、属国内に在地豪族が力を蓄えつつあることがうかがえる。

以上、文献史料と出土文字資料を中心に考古資料を補いながら、中国西南地方における後漢時代の青銅器生産を概観してきた。これをふまえて考古学的研究を進めるのが今後の課題である。

参考文献

【日本文（五十音順）**】**

川村佳男 2021 「漢代銅盂の研究―とくに陽鋳の銘文と文様をめぐって」『中国考古学』第 21 号

齋藤　努 2003 「鉛同位体比産地推定法とデータの解釈について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 108 集

【中国文（ピンイン順）**】**

丁　祖春 1979 「四川彭山県出土新莽西順郡銅板」『文物』第 11 期

広西壮族自治区文物工作隊 1985 「広西北流銅石嶺漢代冶銅遺址的試掘」『考古』第 5 期

貴州省文物考古研究所編 2008 『赫章可楽 2000 年発掘報告』文物出版社

賀　梓城 1956 「西安漢城遺址附近発現漢代銅錠十塊」『文物参考資料』第 3 期

胡　振東 1994 「雲南省発現古冶煉遺址」『文物』第 5 期

李　白練 2009 「通江東漢銅洗考」『四川文物』第 1 期

李　家瑞 1962 「両漢時代雲南的鉄器」『文物』第 3 期

劉心健・劉自強 1983 「山東蒼山柞城遺址出土東漢銅器」『文物』第 10 期

四川大学歴史系考古専業・西昌市文物管理所 1994 「四川西昌東坪漢代冶鋳遺址的発掘」『文物』第 9 期

四川省文物考古研究院・涼山彝族自治州博物館・西昌市文物管理所 2006 「涼山州西昌東坪遺址第二次発掘簡報」『四川文物』第 1 期

孫　太初 1981 「朱提堂狼銅洗考」『雲南青銅器論叢』文物出版社

汪　寧生 1992 『雲南攷古』増訂本、雲南人民出版社

西昌地区博物館 1977 「四川西昌発現貨泉銭範和銅錠」『考古』第 4 期

厳弼宸・劉思然・李延祥・楊穎東・周志清・王浩・姜先傑・黄雲松 2018 「四川西昌東坪遺址炉渣分析与冶煉技術研究」『中国文物科学研究』第 2 期

袁　嘉穀 1923 『孟孝琚碑題跋』雲南図書館（『石刻史料』新編第 2 輯第 20 冊、1979 年）

雲南省文物工作隊 1965 「雲南大関、昭通東漢墓清理簡報」『考古』第 3 期

張　増祺 1990 『中国西南民族考古』雲南省博物館研究叢書、雲南人民出版社

昭通地区文物管理所 1986 「雲南昭通市鶏窩院子漢墓」『考古』第 11 期

【英文】

Jia-Xi Zhou, Jun-Hao Bai, Zhi-Long Huang, Dan Zhu, Zai-Fei Yan, Zhi-Cheng Lv. 2015　Geology, isotope geochemistry and geochronology of the Jinshachang carbonate-hosted Pb-Zn deposit, southwest China, *Journal of Asian Earth Sciences*,98, pp.272-284

Zhiwei Bao, Qun Li, Christina Yan Wang 2017　Metal source of giant Huize Zn-Pb deposit in SW China: New constraints from in situ Pb isotopic compositions of galena, *Ore Geology Reviews*, 91, pp.824-836

謝辞

本報告は JSPS 科研費「漢晋変革の考古学的研究」（課題番号 16H05683）の成果の一部である。中国西南地方の鉱山については大賀克彦さんよりご教示をいただいた。